

取手市埋蔵文化財センター第11回企画展

広瀬誠一郎と利根運河

平成15年

10月21日[火]—12月19日[金]

午前10時～午後4時30分(入館は4時まで)

入館無料/休館日 月曜日

(ただし11月4日と24日は開館して、翌火曜日が休館)



広瀬誠一郎
所蔵 広瀬篤氏



人見寧
所蔵 人見寧則氏



ムルデル
所蔵・提供 富重写真所富重清治氏



利根運河を航行する外輪船銚子丸
所蔵 山中金三氏 提供 流山市立博物館

取手市埋蔵文化財センター 〒302-0007 取手市吉田383
TEL0297-73-2010 FAX0297-73-5003

開催にあたって

このたび取手市埋蔵文化財センターでは、第11回企画展「広瀬誠一郎と利根運河」が開催されることになりました。広瀬誠一郎は、市内の下高井村で代々名主を勤めた家に生まれ、幕末から明治維新期にかけての動乱の時代を青年名主としてよく切り抜けました。明治維新後は、葛飾県・印旛県・千葉県・茨城県の公的な役職を歴任し、北相馬郡選出の初代の県会議員から北相馬郡長となりました。

この広瀬が生涯の最後に挑んだ大事業が、利根川と江戸川を短絡する利根運河の開削です。全長8キロメートル余に及ぶこの運河は、日本有数の運河であり、かつては多くの船が行き交い、産業や経済の発展に大きく寄与しました。そして運河としての使命をはたした後も、首都圏の水不足を補う導水路として、そして流域に残された自然は多くの植物と動物たちの生命を育み、人びとの生活にやすらぎとるおいとゆとりを与えてくれています。

今回の企画展をご覧いただき、まさに生命を賭して運河開削にかけた広瀬誠一郎をはじめとして、人見寧・ムルデルといった先人たちの労苦に思いを馳せていただければ、望外の喜びとするところです。

最後に本企画展の開催にあたり、ご協力をたまわりました皆様に深謝の意を表し、開催のあいさつとさせていただきます。

平成15年10月

取手市埋蔵文化財センター

講演会

「利根運河の自然と文化再発見」

新保國弘氏 東葛地域自然文化研究所所長
日時 11月3日(月) 午後2時から3時まで
場所 旧取手宿本陣染野家住宅
定員 50名 当日受付順

「利根運河と広瀬誠一郎 ー鉄道か運河かー」

北野進氏 産業考古学会評議員
日時 11月15日(土) 午後1時30分から3時まで
場所 センター2階講座室
定員 40名 当日受付順

展示説明

11月1日・2日(午後2時から)、11月15日・12月6日(午前11時から)

例言

1. このパンフレットは、平成15年10月21日から12月19日まで開催される取手市埋蔵文化財センター第11回企画展「広瀬誠一郎と利根運河」にともない、発行されたものです。
2. この企画展の企画とパンフレットの執筆・編集は、当センター職員の飯島章が担当し、その他職員の協力を得ました。
3. この企画展の開催にあたり、次の方々からのご協力とご助言をいただきました(敬称略)。記して深謝の意を表します。

太田尚一、染野修、是永定美、是永みづ穂、捧潔、高橋清、寺田光男、遠山仁恵、富重清治、奈良浩伸、故野口多蔵、能勢幸枝、人見寧則、広瀬篤、広瀬ます、宮本和也、矢口浩、山中金三、山本鉦太郎、故渡辺博小堀地区、財団法人千葉県史料研究財団、千葉県総合企画部知事室、利根運河の生態系を守る会、利根町教育委員会、利根町立歴史民俗資料館、富重写真所、豊田新利根土地改良区、流山市役所秘書広報課、流山市立博物館、流山市立博物館友の会、三角町企画振興課

1. 広瀬誠一郎

広瀬誠一郎は天保8年(1837)に、代々下高井村の名主を勤める家に生まれました。安政2年(1855)には19歳で名主見習役となり、万延元年(1860)に名主となっています。

明治維新後は、取締役・勸農方・戸長・勸農方頭取(以上葛飾県)、戸長頭取・地券取調方(以上印旛県)、第14大区6小区戸長頭取・同育児取締兼務(以上千葉県)、第9大区2小区戸長・同副区長・第9大区1小区副区長兼務・第4回教育会議員(以上茨城県)と公的な役職を歴任し、地方自治の先駆者として、また民権思想の普及者として、下高井村や周辺地域の発展と近代化に努めました。

また明治6年(1873)には、前年に大蔵省から出された牧畜奨励の告諭を受け、牧牛事業に専念したいため戸長頭取を辞職したい旨を印旛県に出願し許されています。また明治13年には共成社という会社を興し製糸業に取り組み、殖産興業にも励みました。

明治11年には北相馬郡書記となりましたが、翌12年に県会が開設されると、広瀬は北相馬郡選出の初代の県会議員に当選しました。さて明治14年の県会では、治水費を県の原案の半額に削減しようとする県北の旧水戸藩領選出の議員(山岳党)と、県の原案を支持する県西・県南選出の議員(河川党)との間で大論戦が起こります。広瀬は河川党の中心人物として活動しますが、結局県の原案は否決され治水費は半減されてしまいました。そこで河川党は分県運動を展開し、さらに翌15年の県会で山岳党が県南・県西の議員定数の削減を提案したのに対して、県南・県西の議員定数の増員を提案し、これを可決しました。これに怒った山岳党の議員は、一斉に退場して辞表を出しました。広瀬は、明治15年2月13日に北相馬郡長になっていますので、この対立に議員として最後まではかかわりませんでした。山岳党と河川党の対立は、初期茨城県会を揺るがす一大論争でした。

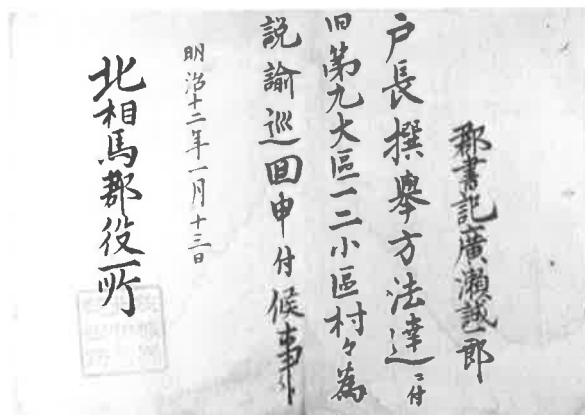
さて北相馬郡長となった広瀬が取り組んだのが、岡堰の改修でした。広瀬は岡堰の上流と下流の村々の治水や利水をめぐる対立を調停し、明治16年には水利土功会を創設、岡堰を北相馬郡長の管理下に置きました。さらに岡堰を煉瓦造に改修することを計画しますが、これは郡長辞職後の明治20年に実現しました。北相馬郡長を辞職した広瀬が次に取り組んだのが、利根運河の開削です。



広瀬誠一郎(中央、広瀬篤氏所蔵) 頭はちょんまげを結び、帯刀しているこの写真は、明治もかなり早い時期に撮影されたものと考えられます。



明治16年の取手宿内の道普請(故渡辺博氏所蔵) 西村文則氏『広瀬誠一郎伝』には、北相馬郡長となった広瀬が、水戸街道の悪路の改修に努めたと書かれています。左側の道から一段高くなったところに白服を着て座っているのが、広瀬と伝えられています。



明治12年1月13日 戸長選挙方法達二付説諭巡回申付(広瀬篤家文書)



煉瓦塙の岡堰(利根町立歴史民俗資料館寄託文書赤松宗旦家伝資料) 北相馬郡長となった広瀬は、煉瓦による岡堰の改修を計画します。この煉瓦塙は明治20年に竣工しましたが、同31年の洪水で大破してしまいました。この写真は、翌32年に修築された12連の煉瓦造可動堰です。

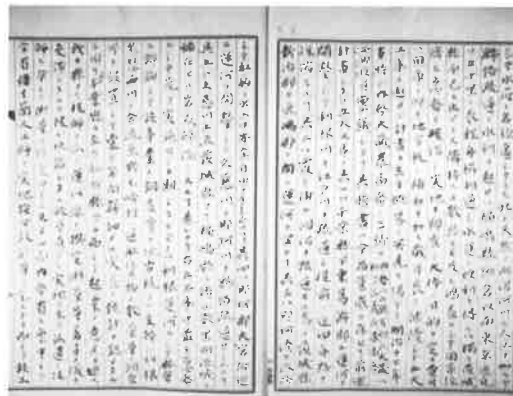
2.利根運河の開削

明治13年(1880)3月に茨城県令となった人見寧は、同17年5月に「茨城県五大工事起業建言」を政府(内務卿・大蔵卿・農商務卿)に提出しました。五大工事とは、①利根川と江戸川を結ぶこと、②涸沼と北浦を結ぶこと、③那珂川と久慈川を合同すること、④久慈川の暗礁を砕除すること、⑤那珂湊港を修築すること、でした。すなわち、いまだ鉄道輸送が本格化していない段階で、水上交通網を整備して東京と茨城県をより緊密に結びつけ、茨城県の産業の振興を計ろうとしたのです。この第1番目の利根川と江戸川を結ぶ事業が、後に利根運河の開削として実現したのです。利根川を使って船で荷物を東京まで運ぶには、まず千葉県の間宿までさかのぼり、ここから江戸川を下らなければなりません。そのため、二つの川を短絡する運河が計画されたのです。

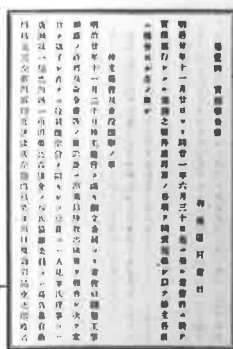
さて広瀬がはじめて人見県令に運河の必要性を建言したのは、これより先の明治14年春とされています。人見はこれを受けて内務省と千葉県令船越衛に運河の開削を打診しますが、船越県令の反対にあいます。船越県令は、運河の開削よりも鉄道の建設計画に力点を置いたようです。事実明治16年5月には、加村(千葉県流山市)と花野井村(同県柏市)を結ぶフランス式ドコービル軽便鉄道の建設願が、地元の人びとから千葉県に出されています。この計画は実現しませんでした。願書は千葉県から内務省と農商務省に上申され、後に工部省にまわされています。一方内務省は、お雇い外国人のオランダ人土木技師デ・レーケに現地の調査を命じ、ここに利根運河開削事業の幕が切って落とされました。明治16年2月には、利根川改修の現地視察に訪れた内務卿山田顕義、土木局長石井省一郎、デ・レーケに、人見県令と広瀬北相馬郡長は利根運河開削を陳情しています。また翌17年に「茨城県五大工事起業建言」が政府に提出されると、農商務大輔品川弥二郎が現地の視察をしています。そしてこのころから多忙となってきたデ・レーケにかわり、同じオランダ人のお雇い外国人のムルデルが利根運河計画の担当となります。ムルデルは実地調査・測量の後、明治18年2月に「江戸川利根川両川間三ヶ尾運河計画書」を内務省に提出します。また人見と広瀬は運河に反対する船越千葉県令の説得に努め、ついに同年6月に千葉・茨城両県は利根運河協議書に調印しました。



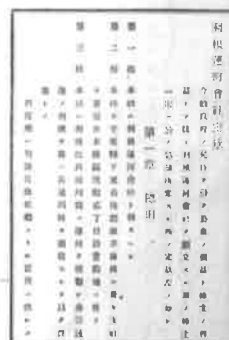
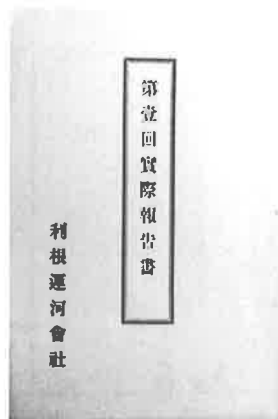
茨城県令人見寧(人見寧則氏所蔵)



大正元年11月 人見寧履歴書(人見寧則氏所蔵) 表紙(右)と「茨城県五大工事起業建言」を政府に提出したことが書かれている頁です。



明治21年6月30日 第壹回實際報告書(広瀬篤家文書)
利根運河会社の最初の営業報告書です。



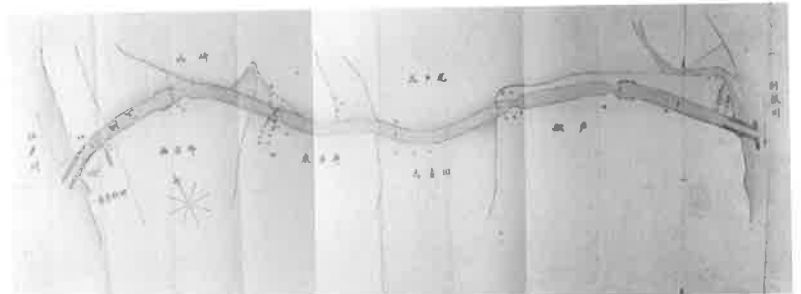
明治21年7月30日 利根運河会社定款(広瀬篤家文書)



ところが1か月後の7月、人見は突然茨城県令を非職となります（非職とは、地位はそのままで県令の職だけを辞めさせられる処分です）。これは前年の明治17年9月に、自由民権派が加波山に蜂起した加波山事件の処置にかかわったことのようにです。次いで県令となった島惟精は、運河の開削を引き続き行おうとしましたが、明治19年5月に病気のため急死してしまいました。次の県知事（明治19年から県令は県知事となります）となった安田定則は、薩摩藩の出身でハイカラ知事と呼ばれ、運河よりも鉄道の建設を重視しましたが、明治19年7月には、茨城・千葉両県知事に東京府知事を加えて、運河の開削を内務大臣に上申して工事の着工を促しています。しかしここに至って、安田県知事の下では県の事業として運河を開削することは不可能と見た広瀬は、同年8月に北相馬郡長を辞職し、民間会社を興して運河の開削を成し遂げようと決心します。

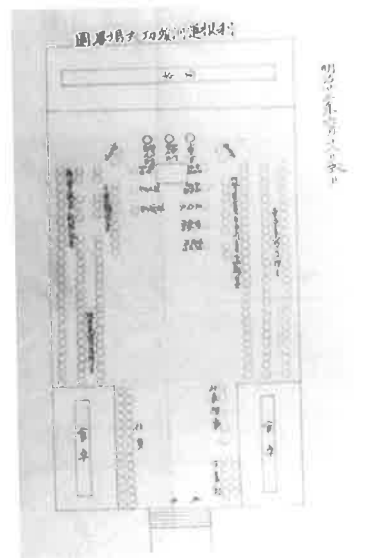
広瀬は8月下旬には東京麻布に人見を訪ね、会社を設立して運河の開削にあたることを相談しています。さらに横浜に高島嘉右衛門を訪ね、易で事業の成否を占ってもらいました。易断は吉と出ました。翌明治20年4月、利根運河会社の有志発起人会、創立協議会が開かれ、株式の募集が始まると、株式8000株、資本金40万円（1株50円）はまたたく間に集まり、利根運河会社は順調な第一歩を踏み出しました。5月には利根運河開削願書・利根運河特許請願書が千葉県に提出され、11月に運河開削免許命令書が交付され、12月の株主総会で人見が社長、広瀬が筆頭理事となっています。

明治21年5月、ムルデルの監督のもとに運河開削の工事は始まり、7月には起工式が挙行されました。工事は沼地や谷などの自然の地形がたくみに利用しながら、3つの工区に分けて行なわれました。約2年の歳月を経て明治23年2月には全線が疎通し、3月からは通船営業が始まり、5月には全工事が終了しました。6月には竣工式が盛大に執り行われましたが、この席に広瀬とムルデルの姿はありませんでした。なんと広瀬は直前の3月18日、かねてからの持病に過労や心労が加わり、東京の旅宿で54歳の生涯を閉じました。またムルデルは日本での雇用期間が満了となり、この時は祖国オランダへ帰る船上の人でした。広瀬とムルデルの心中は、察して余りあるものがあります。



利根運河略地図（広瀬篤家文書）

千葉県令船越衛
 （所蔵 千葉県総合企画部知事室、写真提供 財団法人千葉県史料研究財団）
 船越は広島藩士で幕末には勤王の志士として活動し、戊辰戦争では新政府軍に加わり東北地方を転戦しました。
 最後まで幕府に忠節を尽くした人見とは、相容れないところがあったのかも知れません。



明治23年6月18日
 利根運河竣工式場略図（広瀬篤家文書）



工事中の利根運河（所蔵 矢口浩氏、写真提供 流山市立博物館）

3. 人見寧とムルデル

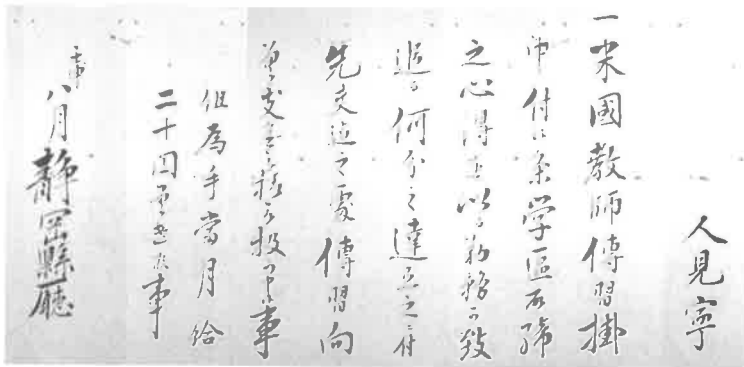
広瀬誠一郎とともに利根運河開削の事業に取り組んだ人見寧は、天保14年(1843)に京都で二条城詰鉄砲奉行組同人見勝之丞の長男として生まれました。文久3年(1863)には上洛した14代将軍徳川家茂の御前で『孟子』を講読した後、撃剣上覧にも加わり、若くして文武両道に秀でた逸材であったことがうかがえます。慶応4年(1868)1月に発生した鳥羽伏見の戦いでは、旧幕府軍の一員として戦いました。江戸に戻った人見は、遊撃隊を率いて旧幕府海軍の榎本武揚のもとに身を寄せますが、同年4月には新政府軍への抗戦の意志を固めた上総国請西藩主林忠崇の下を訪れます。請西藩軍と遊撃隊は海を渡り相模国に上陸し、箱根や小田原で新政府軍と戦いましたが戦況は有利とならず、6月には海路小名浜(福島県いわき市)に渡り、この地で仙台藩や平藩などと共に新政府軍と戦います。そして江戸を脱走した榎本艦隊と再び合流して、9月には北海道へ渡りました。翌明治2年、箱館五稜郭にこもり新政府軍に最後の戦いを挑みます。この時人見は、胴巻の白羽二重を切り七言絶句を書き、指揮旗としました。人見は額に重傷を負いますが一命はとりとめ、榎本の降伏後は東京で投獄生活を送り、後に福岡をへて静岡に移ります。明治9年3月、東京裁判所七等判事となり新政府に出仕しますが、すぐに内務卿大久保利通の勧めで内務省に移り殖産興業政策に邁進します。明治12年5月に茨城県大書記官となり、翌13年3月に県令に進み、以後5年4か月にわたって県政を担いました。この間、弘道館の公園化、養蚕の振興、利根運河の開削に先鞭をつけた事、教育の振興、徳川家大能牧場の再興、県内外からの人材の登用など多くの成果をあげました。県令退官後は利根運河会社社長、台湾樟脳会社設立発起人をはじめ多くの会社の事業に関係し、実業界にも名を残しました。大正11年(1922)12月31日、東京麻布の自宅で80歳の波乱に富んだ生涯を閉じました。茨城県令時代の広瀬との出会いには、とりわけ運命的なものを感じざるを得ません。



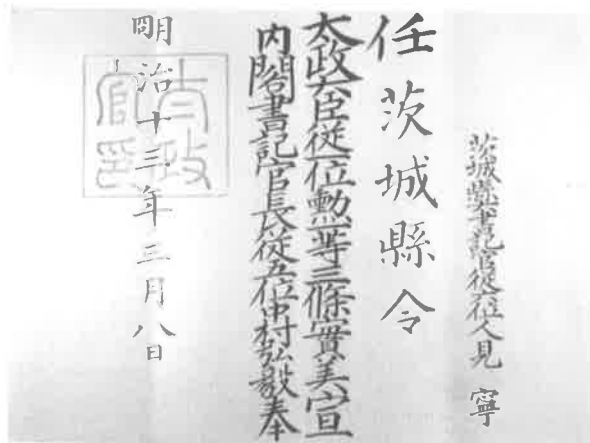
箱館戦争時の人見寧(人見寧則氏所蔵)



箱館戦争で人見が使用した指揮旗(人見寧則氏所蔵)
「幾万の奸兵海陸より来る 孤軍防戦し骨は堆と成る
百戦の運は尽きて今日に至る 好んで五稜郭の下の苔となる」の
七言絶句が書かれています。



明治5年8月 米国教師伝習掛辞令(人見寧則氏所蔵)
人見は静岡で英学校を開いており、外国の事情や英語にも明るかったことがうかがえます。



明治13年3月8日 茨城県令辞令(人見寧則氏所蔵)

ムルデルは、1848年（嘉永元）4月28日にオランダのライデンで生まれ、デルフトのポリテクニカル・スクール（現デルフト工科大学）に学び、卒業後の1872年（明治5）、オランダ水利省に勤務しました。スエズ運河のポートサイトでオランダ商館の建設、ハーグでの上下水用の運河の計画などに従事しました。明治12年（1879）3月に来日、初任給月給475円という破格の待遇で、以後新潟港の調査・東京港計画・見沼代用水の改良・熊本県での築港調査・富山県下の河川の改修計画・三角西港の建設・利根川改修計画などと、東奔西走・八面六臂の活躍をします。明治政府は、鎖国時代からの交流に加えて、国土の大半が低湿地で治水や利水に関する土木技術が発達していたことから、オランダから多くの人材をお雇い外国人として受け入れましたが、ムルデルもその一人だったのです。

明治19年6月には一度オランダに帰国しますが、翌20年5月に再び来日します。そして利根運河の開削をはじめとして、三角西港の建設・大阪港の改築・淀川の改修・横浜港計画・下関港計画と、多くの事業に携わりました。明治22年1月には、日本の土木工事に多大な貢献をした業績が認められ、勲四等が贈られました。明治23年の帰国後は祖国オランダで土木事業に携わり、1901年（明治34）3月6日に52歳で亡くなりました。



ムルデル
（左側、所蔵・提供 富重写真所富重清治氏）
熊本県の三角港で撮影されたもので、
右側が熊本県知事の富岡敬明、
中央が書記官の山下秀実です。
この写真は、熊本市最古の写真館で
ある富重写真所に伝わるものです。



工事中の利根運河（所蔵 矢口浩氏、写真提供 流山市立博物館）
北野道彦氏は著書『利根運河』で、左側手前に立っている
大柄の人物は、工事を監督中のムルデルではないかとする説が
あることを紹介しています。
写真をよく見ると、左側の人物にはひげが無いようですが、
右側の人物はひげを伸ばしているようです。
利根運河の工事でも左の写真のようにひげを伸ばしていたとすれば、
右側の人物がムルデルであった可能性があります。

4. その後の利根運河

利根運河の開通により、水運はこれまでの関宿廻りに比較して距離にして38キロメートル、日程にして3日を1日に短縮することができました。利根運河会社の経営も、主な収入源である通船料の増加により、工事中に生じた負債がなくなり、順調な発展をとげました。しかし明治40年代以降は、鉄道や道路交通の発達により、業績は次第に下降に転じて行きます。利根川の洪水による施設の破壊や、浅瀬の出現による通船への支障、それを取り除くための浚渫作業も、会社の経営を圧迫しました。ついに昭和16年（1941）7月の大洪水で、利根川から江戸川への洪水の流入を防ぐためにつくられていた水堰橋が破壊され、運河としての役目をまったくはたせなくなりました。同年12月、政府は利根運河の買収を決定して、ここに半世紀におよぶ運河の歴史に終止符が打たれました。この間に運河を通った船は、和船・汽船合わせて100万艘といわれています。さらに30年余の歳月を経た昭和50年、建設省は首都圏の水不足を補うため、利根川の水を江戸川へ流す野田緊急暫定導水路として運河に再び水を流しました。生き返った運河は、今も広瀬誠一郎の熱い思いを私たちに伝えているのです。



昭和16年7月の大洪水で破壊された水堰橋
（所蔵 山中金三氏、提供 流山市立博物館）



宮内大臣從五位下喜徳郎宣

昭和三年十月十日

贈從五位

故廣瀨誠一郎

昭和3年11月10日 從五位位記(広瀬篤家文書)
広瀬誠一郎は、利根運河開削の功績が認められ、從五位に叙せられました。

利根運河碑 現在は千葉県流山市の利根運河水辺公園に建つこの碑は、明治41年8月9日に建立されたもので、題額の「利根運河碑」の文字は山県有朋、文章は船越衛の筆になります。ここにはムルデルの名は記されていますがデ・レーケの名は無く、さらに運河開削の最大の功労者である広瀬誠一郎の名もありません。運河に反対した船越の筆になることからして、明治41年時点での現存者にのみ都合よく書かれたもので、歴史の真実を正しく伝えていないとの印象を強く受けます。



現在の利根運河



煉瓦造水門 水堰橋近くの千葉県野田市側(北側)にあるこの水門は、明治41年に建設されたもので、利根運河に関連する明治期の構造物としては唯一現存する貴重な産業遺産です。

主な参考文献

西村文則『広瀬誠一郎伝』、川名晴雄『利根運河誌』、北野道彦『利根運河 利根・江戸川を結ぶ船の道』、北野道彦・相原正義『新版利根運河 利根・江戸川を結ぶ船の道』、新保國弘『水の道・サシバの道 利根運河を考える』、森田美比『茨城県政と歴代知事 戦前四十五名の人物像』、山本鉦太郎『旧水戸街道繁盛記』上・下、北野進「利根運河の史的考察-鉄道か運河か-」、是永定美「利根川と技術文化」・「利根川の煉瓦造水門」(北野進・是永定美編『利根川 人と技術文化』所収)、江戸川の自然環境を考える会『まるごとガイド歩いて見よう利根運河』、利根運河の生態系を守る会『利根運河』、建設省江戸川工事事務所流水調整課『利根運河』、建設省関東地方建設局江戸川工事事務所『利根川と江戸川をむすんだ川の道』、千葉県教育委員会『千葉県の交通・産業遺跡』、流山市教育委員会『流山市史』近代資料編・新川村関係文書・『同』別巻・利根運河資料集、取手市史編さん委員会『取手市史』近現代史料編Ⅰ・『同』通史編Ⅲ・『取手市史資料目録』第6集・『同』第11集

取手市埋蔵文化財センター第11回企画展

広瀬誠一郎と利根運河

平成15年10月21日~12月19日

編集/発行 取手市埋蔵文化財センター 制作/印刷 有限会社石山宣伝研究所